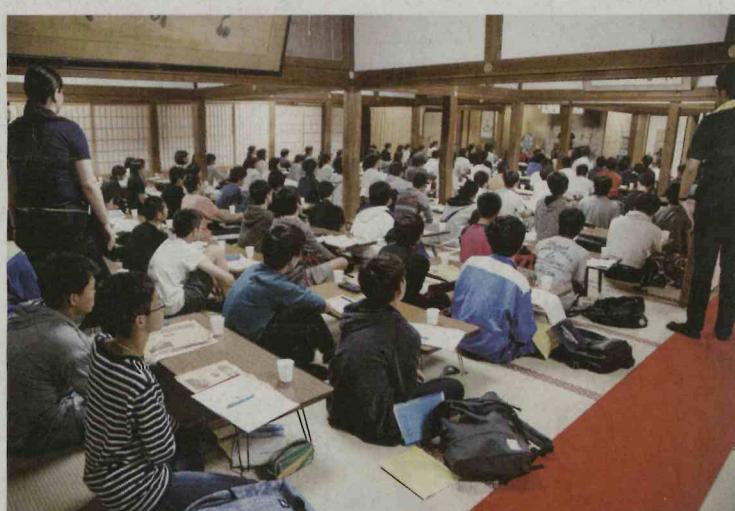


風 吹こうとも

2度の合併 すべてにプラス

イングの青木辰二名誉顧問。「創造、挑戦、調和」を理念に置いている
=大阪市浪速区の同社本社



35年間続いている和歌山・高野山での「夏期特訓合宿」
=今年8月

感覚で、この人なら信頼できると思い至つたんです。事業を広げるという感覚だけではなく、「子どものため、親御さんのために何がいいか」を考えた末で結論だった。成果は表れ、生徒数は合併前のそれぞれの合計を大きく上回るようになりました。

昭和44年、23歳で英会話スクールを創設して以降、「たくさん的人が英語に楽しくられる場をどんどん増やしていく」と思い描いていました。2年後にはスクール名を「I-SI英語学院」とし、とりわけ子どもたちへのアプローチを重視しました。

I-SIは、国際語学機関という意味の「インターナショナル・ランゲージ・インスティチュート」の頭文字から取りました。けれど、そのうち中学生の保護者から「英会話ではなく、学校英語を教えて」「数学も教えてほしい」という声が多く寄せられるようになつた。僕としては英会話専門の形態を続けたいという思いもありました。2年後にはスクール名を「I-SI英語学院」とし、とりわけ子どもたちへのアプローチを重視しました。

時代のときには業界を驚かせる2度の大経営判断があった』
昭和62年、I-SIと同じく南大阪で塾や予備校を開設していた「西日本教育アカデミー」と、互いの組織をいったん解散し、対等合併しました。塾同士の合併というのは、おそらく業界初だったでしょう。このときに社名を「イング教育アカデミー」としました。イングはI-SIと西日本、集合体を意味する「ギャザリング」の頭文字(I、N、G)を組み合わせたもので、現在進行形で

合併は僕から持ちかけました。「個人経営から組織経営へ、マイカンパニーからアワーカンパニーになろうよ」と。そうした方が、相乗効果でよりよい教育が提供できる、多様化するニーズに応えるきめ細かなサービスが提供できると確信していました。事業を広げるという感覚だけではなく、「子どものため、親御さんのために何がいいか」を考えた末で結論だった。成果は表れ、生徒数は合併前のそれぞれの合計を大きく上回るようになりました。

2度の合併は将来を見据えた決断でしたが、対等の立場で行ったことが大きかった。相乗効果を最大限発揮するには、遺恨があつてはならない。振り返ると、生徒にも社員にもプラスになる「良縁の企業結婚」ができたと感じています。

大阪経理学院との合併の翌年、創立25周年記念パーティーで、こんなあいさつをしました。今は大変な時代だけれど、大きく変わらざる時代でもある。先んじて変化をつくり出す企業でありたいと。この思いは、今も変わっていません。

時代は「学習塾」
相乗効果求めて

青木辰二 名誉顧問

イング

関西
経営者列伝

第3章

つていきます。

教育事業のベンチャーを志向し、創業当初からアイデアを凝らしてさまざまな取り組みに挑戦しました。小学生が英語劇を披露するフェスティバル、夏休みを利用して洋上英語スクールやサマーキャンプ…。高校受験を控える中学3年生が和歌山・高野山の宿坊に赴き、3泊4日で勉強漬けになる「夏期特訓合宿」は、スタートから35年たった今も続っています。

西日本教育アカデミーの社長は、僕より後に塾を始められるというこどで、開業前にノウハウなどをアドバイスし、以来フランクなつき合いを続けていました。共存共栄できるように教室の進出地域を調整し、まだ珍しかったコンピューター分析を採用した学力診断テストや保護者を対象にした教育講演会などを一緒にやっていた。社員同士の交流もありました。

西日本教育アカデミーの社長は、僕より後に塾を始められるというこどで、開業前にノウハウなどをアドバイスし、以来フランクなつき合いを続けていました。共存共栄できるように教室の進出地域を調整し、まだ珍しかったコンピューター分析を採用した学力診断テストや保護者を対象にした教育講演会などを一緒にやっていた。社員同士の交流もありました。

西日本教育アカデミーの社長は、僕より後に塾を始められるというこどで、開業前にノウハウなどをアドバイスし、以来フランクなつき合いを続けていました。共存共栄できるように教室の進出地域を調整し、まだ珍しかったコンピューター分析を採用した学力診断テストや保護者を対象にした教育講演会などを一緒にやっていた。社員同士の交流もありました。

文・内田透/写真・門井聰

生涯教育へ進出
変化つくり出す

《平成5年には、資格・技能教育を手掛けていた大阪経理学院と合併。幼児から社会人までの総合学習機関へと成長していく》